

4 月のおはなし

「桜」

本

屋を営む祖父が急逝し、僕は忌引で会社を休んで、久しぶりに故郷に帰った。葬式はそばに住む両親が葬儀屋と手際よく片付けた。祖父は八〇〇度の炎に焼かれ、幾つかの白くて乾燥した破片になった。パサパサしたそれを骨壺に押し込む作業は、もの悲しくもどこか現実感はなく、僕はどういふ感情を持てばいいか、分からなかった。

骨が仏壇に納まると両親は祖父が残した店の処置と相続税に

1

ついて話し合い始めた。彼等は祖父が道楽で始めた古本屋に興味はなかった。

僕はひとり席を外し、祖父の店に向かった。形見分けに何か

一冊もらうつもりだった。薄暗い店の中は、祖父が四半世紀かけて集めた古本たちの沈黙で満たされていた。

本の背表紙を撫でながら、ふと一冊の本に眼が止まった。古

い大部の医学書だった。こんな本を買い取った祖父の人柄が忍ばれた。

本

を手にとって頁をめくる
と、中ほどに絵葉書が挟まっていた。元の持ち主がおりがわりしていて、売るときに抜き忘れたものだろう。

買い取る時に気付かなかったのだろうか。まめだけが取り柄だった祖父にはめずらしい。

葉書の宛先の住所は、ここから少し離れた湖の畔にある小さな町だった。

2



学書と葉書を入れて湖畔の町に向かった。葉書を届けよう。心地よい風が頬をなでた。

や

はり祖父が気付かなかつたとは考えにくかった。筈はないのだ。

或いは誰かに見付けて欲しかったのかもしれない。祖父はそれを察して気付かない振りをしたのかもしれない。

自転車漕ぎながら、僕はとりとめのない物思いに耽る。段

どうするか、僕は考える。休みはまだ四日残っていた。

次の日、運命的に天気はよかった。僕は自転車の前籠に医

差を拾う度、籠のなかで医学書が踊った。

湖

畔の町で、僕は呆然と立ち尽くしていた。

僕は何度か道を尋ねながら、とうとう葉書の住所にたどり着いた。しかし、そこはただ広い空き地だったのだ。

湖まで続く草むらの中ほどに、大きな桜が一本立っていた。僕はその桜がとても美しい事に気が付いた。そして吸い寄せられるように樹のそばまで歩み

寄った。

澄み切った青空、優しい風が枝を揺らし、大木からは、はらはらと花びらが舞い降りていった。まるで無限に溢れ出るよう



だった。昔ここに人が住んでいたのだろうか、この本を売った人もこうしてこの花を眺めていたのだろうか。

僕は時を忘れて陶然と眺め続けた。ふと我に返った時、手に持っていた筈の葉書はいつのまにかなくなっていた。

落

としたのだろうか、慌ててあたりを探したが、桜の花びらが次から次へと野原を埋めていき、どうしても見つけることができなかった。 ■

5



妄想の地平線

4月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU